さるなり、曾て聞く我國には地震甚た多けれは、隨て家屋の構造も之れと相伴はさるへからす、今日にありては夫々の專門家が、互に相聚りて地震に耐ゆるには、煉瓦造り或は木造孰れ平良き乎との問題を講究する最中なりと、而して今日迄の處にては、煉瓦造りを以て危險なりとするもの頗る多きかごとし、之れ固より安政年間の大地震の如きものに際會して、其實地を經歷するにあらされは、斷定し難き談たれども、道人も又煉瓦は餘り安全なりと保證する能はさるなり、我日本造りの家に於ても、土藏のごときは隨分地震には耐ゆることを得るもの丶由、然らは彼の火災を慮りて煉瓦造りを建てんとならは、土藏造りにても隨分其目的を達し得へきなり、蓋し數百年の經歷に依り、今日の建築が尤も其地方に適せるを以て生存せしものなるへく、隨て其沿革を研究するにあらすんは、決して輕易に改め難き事情なきにしもあらさるへし況んや其外形上より之を見るも、煉瓦造りは何となく「べんき」臭りの兄弟分たるを免れさるか如き体裁あるをや、況んや土藏造りは何となく奥床敷くして、價直あるか如き有樣なるをや。

抑も家屋は會に膝を入るゝを以て目的とするのみならす、幾分か粧飾の具なれは、其体裁によりて、其主人の人品を推測することも出來べき位のことなれは、社會に於て奔忙するの輩は、宜しく其建築法に意を用ひ、特に商業社會に在りては、假令少しく折衷する所あるにもせよ、土藏造りを以て正則の家屋としたらんには、種々の點に於て必ず必要を見出すに至ることあるべし、偶々某市街を過き感する所を寫す事如此。

（完結）

音樂の改良に就て

文學博士　外山正一

本編は博士が應和會に於ける演說の速記なり

本會は音樂に熱心なる諸君が音樂の改良發達の爲に開設をせられた會であると云ふことであります、それで此前の會の時にも出席しろと云ふことを或る會員から御話がありましたが、差支があつて出られませぬでした、然るに今日又會があるに付いて出席しろと云ふ御話がありました、併し今日は種々差支がありまして、諸君の有益なる御演說もありませうし、又種々面白い音樂なども段々とあることであらうと思ひますが、それを拜聽することが出來ませぬのは甚だ遺憾に存じます、併し本會に對して一言祝詞を述べ且つ聊か希望を述べやうと思ふ。

本會の如く音樂の爲に熱心なる諸君が團結して、さうして音樂の發達進歩を計られると云ふ會は、他にはまだないやうに考へて居ります、是まで音樂會と云ふものがありまして音樂其ものを奏すると云ふ會は大分ありまする、けれども音樂奬勵の爲に、音樂發達の爲に特に其目的を以て出來て居る所の會と云ふものは、本會が或は唯一のものであらうかと思ひます、而して唯今委員の報告に依りますると云ふと、まだ盛んであるべきのに思ふ樣に盛んでないと云ふ大いに嘆息の言もありましたが、併し物事は微々たる所より始つて段々と盛大になつて行くと云ふことが順序なのであります、それ故に此會の如きも創立以來まだ日も淺いことでありますに依つて、今日は微々たるものであつても、年一年に盛大に赴いて行く、其事業も擧つて行く、有益なる論說も出て之を實行することにもなると云ふやうな時が追々に來ることであらうと思ひます、デ今日御集りになつた諸君は、此少數なる中に御加りになつて居る諸君でありますから、諸君の御熱心の程は感服するのであります、此御熱心以て益々此事業に從事せられ、尙ほ熱心なる者を集めて此會を段々と盛んにせられて、種々雜々な音樂上の問題などを討議して、さうして進歩改良を計られることになるであらうと云ふことは我輩の疑はぬ所であります、此會の如きは我邦の音樂の發達の上には必ず著しい功績のあるものとなることは疑はぬ所であります。

それからして此音樂のことも繪畫彫刻等の美術と同樣に、今日の所では我邦ではまだ問題である、疑問である、繪畫の如き彫刻の如きもどうも西洋風のものは、之を作る所の者は熱心になつて作り出しても之を社會が歡迎することの熱度が實に低いものであるやうに思はれる、日本の美術品であると云ふと非常に歡迎されて、さうして展覽會などに出品があつても求める人が中々高價の物でも之を買つて行くことが實に多い、上野の展覽會でありましても、谷中の展覽會でありましても、日本の美術品の賣れることは中に盛んなものである、之に反して油繪の方、昨今展覽會のある白馬會の如きでも、油繪の方では新派と云ふやうな譯で、油繪の方で氣炎を吐いて居る人達が團結して居る會である、昔からの派から見ると越きも一層面白いやうに先づ其人達は言つて居るのである、併し社會が歡迎することはどうであるかと云ふと、其熱度が低いやうである、白馬會の出品を買ふ者は甚だ少ない、谷中の美術院のものと白馬會のものとの世間の歡迎の仕方と云ふものは餘程違ふことである、世間が歡迎することに於てさう云ふ相違があるから、それに依つて優劣を極めると云ふことは出來ない、其優劣は容易に分るものでない、それで之を人が歡迎するとか歡迎せぬと云ふこ

とは種々の事情があつて――美術上に於ける所の優劣と云ふことの外に種々の標準に依つて決定せられることとおもはれる、さう云ふやうな事情でありまするからしてそれに對して優劣の斷定を俄かに下すことは出來ぬが、兎に角茲に歡迎せられる、せられぬと云ふことの事實は存在して居るのである、之と等しいことが音樂に於てもある、音樂者も、西洋流の音樂者も段々と出來て來て、隨分長い間年期を入れて相應なる音樂者であつても、音樂の純粹なる美術上の標準から言ふと隨分優等なる者があつても、世間で歡迎することに於てはそれ程優等なる者でないと云ふ者を大いに喜ぶと云ふやうなことがある、其事情と云ふものは種々樣々あつて、特に音樂の優劣には因つて居らぬことであらうと思はれる、それであるに依つて將來西洋流の油繪、繪畫等が成立つて行くと云ふものはどう云ふ事情の下に成立つて行くか、音樂が將來西洋流のものが日本に行はれると云ふものはどう云ふ事情の下に行はれるかと云ふことは一つの問題であると思はれる、それであるが此美術と云ふものも、唯美術として美術上の製作物として優等なるものであれば、必ずしも人が之を贊成する歡迎すると云ふものではないと云ふことは、是は隨分あるのである、が美術の存在して行くと云ふものも矢張社會の人の心に叶ふ、社會の人に需用と云ものがあつて之に應ずる所のものでなければ到底行はれぬと云ふことがあらうと思はれる、人の心を喜ばせる、且又人の必要と云ふものを充たすことが出來ると云ふものであれば、是が段々と行はれて往くことであらうと思はれる。

それで先づ西洋の繪畫彫刻に就て考へて見まするとと、繪畫彫刻と云ふものは西洋のは中々不景氣である、不景氣であるが其中どう云ふ所に於て段々と位置を占めて來るかと云ふと、西洋の繪畫彫刻が最も適したる所に於て勝利を得て來るのである、それは何であるかと云ふと、此銅像と云ふやうなもの、場合に於ては西洋の流儀のものが中々行はれて來るやうである、又畫像の如きは油繪でなければいかぬ、日本畫では到底人の肖像と云ふものを描くことはむづかしい、到底油繪はどは良く出來ぬのである、依つてあの側に於ては油繪には敵が無いと言つて宜いものであらうと思はれる、併し其外の花鳥であるとか、山水であるとか云ふものに至つては中々西洋流のものが勝利を得る譯には往かぬやうである、それからして又西洋流のものと日本流のものとの考が、どちらも狹隘な考を持過ぎて居るやうに思はれる、日本畫の方では西洋畫をまるで許すべからざるもの、斯う言ふものは到底日本には不適當なものであると云ふ考、油繪の方であると云ふと日本畫を潰して仕舞はなければいかぬと云ふやうに考へて居るのが普通である、中にはさうも見て居らぬものがあるが多くさう云ふ考を持て居る、是が或は間違ッて居りはせぬかと思はれるのである、と云ふのは或は日本の繪畫も改良して幾分か發達せしめなければならぬ、西洋の繪畫の如きも純然と西洋流のものでなしに、日本には日本のものとして之を用ひることにしなければならぬのである、日本の國の油繪としなければならぬ、それに就ては是までのものよりも改良を加へて特種のものを日本から一つ作り出さなければならぬと云ふやうなことでありはせぬかと思はれますが、まだ其邊は考中であります、或はさう云ふことではないかと思はれる、それから音樂の如きも西洋の音樂が行はれぬと云ふが、或る場合には西洋の音樂が唯一に行はれて之に敵無しである、それは何であるかと云ふと樂隊と云ふものである、樂隊に日本の音樂では迚も往かぬ、それから又軍歌と云ふもの、軍歌に日本の音樂では迚も往かぬ、斯う云ふ場合に於ては、モウ西洋流の音樂と云ふものが全然勝利を得て居るのである、而して將來又どう云ふ所に於て西洋の音樂と云ふものが行はれるやうになるかと云ふと、廣く多人數の者に愉快を與へると云ふやうな場合であるとか、多人數の者に莊嚴なる感情を起さしむる、多人數の者に悲哀なる感情を起さしむるであると云ふやうな、そう云ふやうな機會には西洋流の音樂と云ふものが段々行はれて來ることではないかと思ふ、日本の音樂と云ふものは、多くはどう云ふ途に是まで利用されて居るかと云ふと、或は少數なる人の幾分か猥褻的の快樂を滿足させるやうな場合に多く行はれて居ると云ふやうなことがありはせぬか、それで音樂の用ひられる所の機會、どう云ふ場合に音樂が用ひられるか、其場合に依つて、或は日本の音樂が適した時もあるし、西洋の音樂が適した所もあるだらうし、又西洋の音樂も日本に應用するには幾分か日本流に化して來ぬければならぬと云ふやうなこともあるであらうと思ふ、それから日本の音樂も是までは誠に不都合なる所の文句や何かゞあつたが、之を今後に於て使用する日には、どうしても改良を加へて來ぬければならぬと云ふことになる、それで社會の進

歩と共に日本の音樂の如きも必ず改良して行くものであらうと思はれる、日本の音樂は全然廢滅に屬すべきものであると云ふやうな考を持つて掛ると云ふのは、或はどう云ふものであらうかと思はれる、西洋の音樂の通りのものを之を其儘でソックリ日本に入れゝは宜いと云ふ考であるのもどうであらうかと思はれる、其邊は兩者共、日本の音樂に關しても、西洋の音樂に關しても、大いに研究をせぬければならぬことであらうと思ふ、各々適當なる用ひ場所がある、學校などで言ふと、學校ではどうしても西洋の唱歌でなければならぬ、日本の歌の常盤津とか清元とか長歌とか云ふものをやる譯には往かぬ、日本の音樂の好きな人でもさう云ふ勇氣は迚も無い、それであるに依つて、どう云ふ時にどう云ふ音樂が適するかと云ふことを考へて、さうして成るべく西洋の音樂は西洋の音樂の適したやうな所に用ひて往くやうに計つて往かなければならぬ、將來さう云のことに段々となつて行くだらうと思ふのであります、さう云ふことに就ての研究と云ふものは音樂者もやるが宜し、又それに就ての種々な說を提出すると云ふことは、本會の如きものに於て、段々と意見を闘はして試るやうなことになつて行つたらば宜からうと思ふ。それで音樂のことに就ても又美術のことに就ても色々御話をしたいこともありまするけれども、今日は先刻申した通りに他に約束がありまして行かぬければならぬから、極くちよつとした一つのことに就て意見を述べたいけであります。

（完）

感恩と忘恩と

琴陵女史

佛蘭西國の片田舍に、ジュリアンと呼べる一工匠の孤兒、齡八才許りなるがありけり。さりとて、別に、たよるべき、親戚もなく、將た、救を求むべき、慈善家をも、知らざりければ、殆んど、飢餓の犧牲たらんとせしが、其天運や强かりけん。終に、ヂュラクと呼ばるゝ一慈善家の爲めに、救ひあげられぬ。そも、ヂュラク氏の人となりは、啻に、慈善心の、深きのみならず、義俠心にさへ、富めるを以て、いと多くの資本を給し、此憐むべき孤兒をして、其亡父の遺業を、繼がしめんとて、當時有名なる、或る工匠の許に、其塾生として遣はしけり。げに、人を待たざる光陰は、無遠慮にも、此孤兒を驅りて、早や、十七歲の春をぞ迎へしめぬる。一日、ヂュラクより、予は、今日、汝に示すべき一事あり、速かに、予が宅に來るべしとの、消息ありしかば、ジュリアンは、何事ならんと、急ぎて、其家を訪問れぬ。恩人ヂュラクは、天の爲せる溫顏を、一層柔らげて、一個の金包を、取り出だし、やよ、ジュリアンよ、こはこれ、汝が、佛國內を、旅行して、遁れ、一個の良工となるべき料ぞかしと、云ひけり。仔細を知らざる、ジュリアンは、いかでかは、驚かざるべき。暫しが程は、忙然として、唯、其恩人の笑顏を見詰むるのみなりしが、漸くにして、口を開き、オ、、我が至敬至愛の恩人よ。予が今日迄の生命は、圓滿溢るゝが如き、君が慈惠の賜物なるに、猶此上に、予が今日、亡父にも劣らぬ程の、一工匠となりしも亦、君が仁恕の結果なり。然るに、重ね〳〵、又かゝる恩命を承るは、夢か現か、さなきだに、此年月日比、海よりも尙深き、御鴻恩は、如何にせば、其萬分の一だに、報い參らすることをか得べきと、感泣せざる日もなきに、又もや受くる恩惠は、餘りの重荷なるべきにと、一度は喜び、一度は危み、疑團の雲に蔽はるゝ、いと可憐なる少年が顏色を打ち見やりて、そは、過勞なり、杞憂なり。幸福なるものは、あらじかし。これ、汝が、鐵石の精神もて、八年間の星霜を、終始一日の如く、倦まず、曉まず、怠らず。一心不亂に勉勵し、他人の企で及ばざる、好成蹟を顯はし、名譽の報酬なるべければ、いで、今一層の奮發して、やがて、青籃の榮譽を博し、古鄕に、錦を飾られよ。これ汝が、予に對する、完備の報恩なりけりと、眞心籠めし、慈仁の言葉は、一々、ジュリアンが腦裏に刻まれて、暫しが程は、潸然と、感謝の涙に咽びけり。斯くて、ジュリアンが、感恩の奮勵は、僅々、五回の春秋を迎へて、いと滿足なる研究の効を奏し、至る處に、好評を博しければ、今は、寸刻も早く、其懷かしき、古鄕に、立ち歸り、霜雪の晨、風雨の夕、現に、夢に戀慕へる、恩人ヂュラクに、目のあたり、其發達を、喜ばしめんと、欣然として勇み立ち、急ぎて、歸途に、上りけり。嗚呼、昊天は、如何なれば、此の不幸なる孤獨者を、猶、苦しめんとは、し給ふか。彼れが終天の希望たる、唯一の樂み、無二の喜は、其恩人、ヂュラクが、健全なる、恩顏に接するにあり。さるを、彼が、其古鄕に到着しける時は、早や、其愛慕せし恩人は、已に、此世を去りたる後なり

深く心を、痛むる勿れ。人世、誠てふものを離れては、